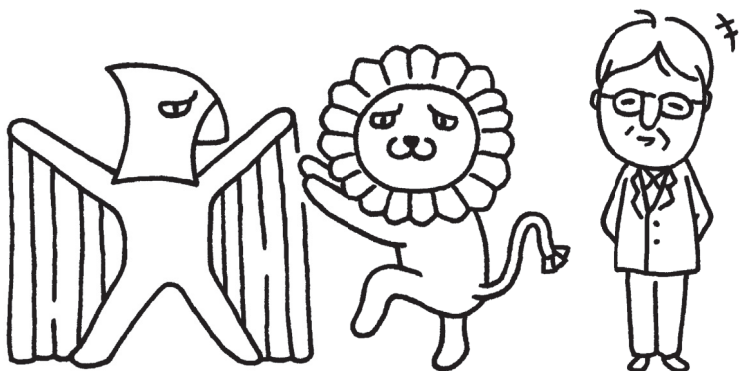


もくじ

第1部	プロローグ	1
第2部	講義	11
I	避けて通れない「難しさ」	12
II	「学び方」の意味	22
III	法学者の「法学嫌い」自慢	35
IV	法律の陰に隠れている人間	49
V	抽象的な法律用語	56
VI	法律が踏み込んではいけないもの、 そして、おカネについて	69
VII	刑事法で問題になること、そして、 条文の背後に隠れた秩序や意味	77
VIII	法と裁判はどうして必要か、 そして、どこが素晴らしいのか	100
IX	概念装置で見る新しい世界と 法律的な考え方	115
X	当たり前だった世界のもろさと 法律を学ぶ人への期待	128
第3部	エピローグ	139

登場人物紹介



ワッシー

元の姿は有斐閣社章の左側（鷺）。常識人。真面目に勉強に取り組む。シッシーに対し時に困惑しつつ、ツッコミとフォローを欠かさないナイス相棒。

シッシー

元の姿は有斐閣社章の右側（獅子）。やや愚鈍であるが優しい性格。奔放な発言でワッシーとアオキ先生を振り回すが、ときに鋭いことを言う。

アオキ先生

有斐閣の会議室にカンヅメとなっていたところ、シッシー＆ワッシーと再会し、講義をする。2人から信頼されるが、たまに古いことを言って引かれる。



第1部
プロローグ



1 獅子王と鷲王の会話



壁の向こうが騒がしいようじゃ。



鷲殿、ご機嫌いかがであるか。



これは獅子殿。朕は相変わらず静かに社章に籠居し、つつがなく消光しておる。で、貴公のおわす壁向こうから、先ほどからうるさく音がするが、いかがなされた。



朕の姿を思い浮かべなされよ。朕は社章の真ん中の壁をつねに両手で叩いておるではないか。



叩いておるのか。てっきり押しているものとおってあった。貴公が少しでも自分の空間を広げようとして、隔壁を押し広げようとしていると疑っておった。永年の勘違い、いや、ご無礼つかまつった。貴公の怪力でわが領域が狭められ

ぬよう、精一杯翼を広げて頑張っておった。しかし鳥類の王といえども百獣の王に比べると非力、いささか疲れておったところじゃ。



ノックじゃよ、ノック。やや品位に欠けるが、こっそり片足を上げて蹴ったりもしておる。ちなみに、推敲という言葉もわれらが社章から生まれたという説もある。社章から靈感を得た詩人が、「獅子は推す社章の壁」という詩句が良きか、はたまた「獅子は敲く社章の壁」とすべきかと我を忘れて苦吟した。そこから文章表現を練り直すことを「推敲」というようになった。



つまらぬ冗談であるな。王の威厳を大切になされ。



失敬。たしかあれは唐代の詩人の故事じゃったな。



さよう。賈島と韓愈の故事である。ひとつ賈島の詩をそらんじてみせようぞ。



鶯殿よ。待たれよ。なんぞむなしゅうないか。



うむ、確かに。なにが悲しゅうて、かくも狭き社章の中で、たった2人の蘊蓄合戦。



そこじゃ。朕もむなしさに堪えかねて鶯殿とひとつ相談をしたくなり、それで先ほどからノックをしておった。覚えておられるか。以前、貴公とは有斐閣城主エグサ公配

下の「くのいち」の呪文により社章の外に徹行し、愉快的思いをしたことがあったな。



よく覚えておる。貴公がシッシー、朕がワッシーにそれぞれ身をやつし、巷に出て行った時のことじゃの。あれは欣快至極であった。ぜひまたあの「くのいち」たちを召し出そうぞ。あの者ども、なんと申したか。



たしかミヤケとナカノと申しておった。

2 ミヤケ・ナカノ登場



む、何者じゃ！



お久しゅうございます。ミヤケにございます。気配をお察して参上つかまつりました。姉貴分のナカノもふたたび同道しております。



ナカノでございます。両王様におかれましてはご機嫌うるわしゅう。お話は「地獄耳の術」で聴いておりました。わたくし、いにしえの平安京に放たれた平家の密偵、^{かじら}禿の子孫にございます。



おお、あのおかっぱ頭の。聞いていたなら話は早い。すぐに社章の外に出せ。



かしこまりました。ところで、この機会にアオキ先生にも謁見をお許しになりませんか。



アオキ。あの法学教師か。



さようでございます。ちょうど今、かつて両王様に「判例の読み方」を講義したアオキ先生（青木人志『判例の読み方——シッシー&ワッシーと学ぶ』〔有斐閣，2017年〕）を、当社会議室に軟禁しております。約束の原稿を、いつか書く、こんど書く、すぐ書くと、空手形ばかり切り続けておりましたので、ついに捕えてカンヅメにしております。



ねえ、ミヤケ。アオキ先生に両王様への御進講を命じて、またそれを本にするのはどう。



あねさま、それは名案ですね。鷲王様、獅子王様、いかがでしょうか。こたびの原稿は「法律の学び方」というものでございます。その内容を御進講せしめてもよろしゅうございますか。



くるしゅうない。やってみい。



面白そうじゃ。

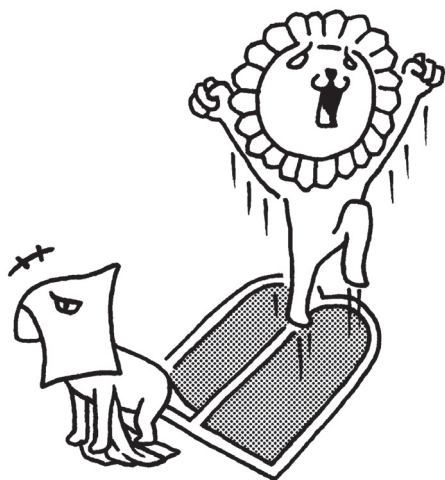


では、さっそくわれらを社章の外に出せ。



かしこまりました。では、いざ、ロツポウの呪文を！

臨・兵・闘・者・憲・民・刑・商・両・訴・法！



3 有斐閣会議室にて



自由だあ！



外の世界は広くていいなあ！



で、アオキ先生、どこにいるの。



この会議室の中です。すぐ逃げ出してカレーを食べに行こうとしますので見張っています。神保町はカレー激戦区ですから。



それ、ヌーよりおいしい？



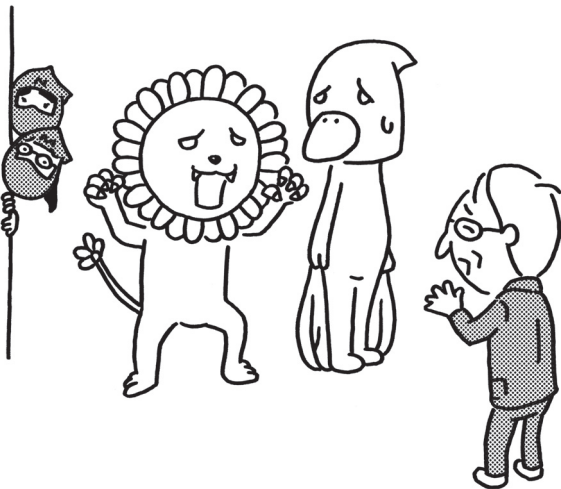
それは、ちょっと、わかりかねます。わたくし、ヌーを食したことは、まだございませんので。あ、ビーフカレーはいかがですか。でもインドカレー屋さんにはございませんね。なぜかと申しますと、ヒンズー教ではウシは聖なる動物とされておりまして……。



ミヤケ、そういうのはどうでもいいの。さっそく中に入って、アオキ先生にまた会いましょうか。



失礼いたしました。





シッシーとワッシーじゃないか！ 久しぶりだね。また会いに来てくれたんだね、うれしいなあ。



ごぶさたしています。



あれ、また、太った？ あんまり太ると、ほんとに食べちゃうぞ。前よりもっと体に悪そうだけど。



あっはっは。2人とも変わらないね。



このたびはシッシーとワッシーを相手に、「法律の学び方」を講義していただきます。



そしてそれが終わるまで、この会議室から出られません。カレーも食べに行かせません。



わたくしどもは講義の間じゅう見張っております。ご安心ください。お邪魔にならぬよう「ものしずかの術」で気配を消しております。



ミヤケの得意な術です。



そうだ、それならいい考えがある。シッシーとワッシーに講義するけど、2人にもときどき参加してもらおうかな。



そのようなことはどうかおやめくださいませ。忍びの者は決してオモテには出ないものでございます。



まあそう固いコト言わないで。名にし負う「有斐閣くのいち」でしょ。民法学者の大村敦志先生に君たち一族のことは教わってるよ（「有斐閣の女性編集者たちとともに」『書斎の窓』2017年7月号）。「有斐閣くのいち」は法学の術を得意とし、伊賀者・甲賀者をはるかにしのぐとか。



大村先生はそんなことはお書きになっていません。すぐ話をおもしろくしようとなさいますね。悪い癖ですよ。




ごめんなさい。



わたくしどもは、法学の術をたしなむ程度でございます。



まあそう謙遜しないで。法学学習の先輩が同席してくれると、講義がやりやすいんだ。必要なときは2人に呼び掛けるからね。



第2部
講義

避けて通れない「難しさ」



さて、シツシー、ワツシー。じつはね、そろそろシューカツかなって思っているんだ。



食べたくないな。シュークリームにパン粉つけて揚げるの？ 衣だけじゃないか。身を入れてくれよ、お肉だよ、お肉。



相変わらず食べ物のことしか考えないんだな。「就活」に決まってるじゃないか。先生は転職したいんだよ。



いやそうじゃなくて「終活」なんだ。「法学教師としての終活」を考えていた。あと数年で定年退職だからね。残された教師生活の中で自分は何を学生に伝えたいか、真剣に考えちゃう。30年法学教師をやってきたけれど、いまでも「法学って難しいなあ」って思う。そんな教師が初学者に教えるんだから、迷いばかりさ。そのことを正直に話そうかなって思っていた。



私はダメな法学者です、ロクな先生ではありませんって、いきなりの告白？



そこまでは言っていないよ。



いや、そうかもしれない。でも、そうでもないかもしれない。三ヶ月章先生という民事訴訟法の大先生がいらしてね。東大で教えたあと法務大臣もなされた。その三ヶ月先生ですら「法学入門担当者のこわさ」についてお書きになっている。「たとい教師生活何十年という古株であっても、法学入門の講壇に立つと足がすくむのである」とまでお書きになっている（三ヶ月章『法学入門』〔弘文堂、1982年〕2頁）。いわんや私をや。



開き直ったね。三ヶ月先生はどうして、こわくて足がすくんじゃうの？



ひとつは、新入生が最初に聴く法学入門の講義によって法についてのイメージを決定的に形づくってしまうかもしれないという責任の重大性。もうひとつは、自分の法学研究者としての過去のすべてがそこで秤はかりにかけられていると感じざるをえないからだ、つておっしゃっている。



法学者としての「最後の審判」を受けるみたいなものでしょうか。



うん、法学入門の講義は、研究者としての全存在を賭けるようなものだっていうことだろうね。ボクは研究者としては、三ヶ月先生の足元にも及ばないけれど、かりに教師としての全存在も天秤にかけられるとすると、自分がずっと

感じてきた「難しさ」についての話を正直にしないわけにいかないと思うんだ。



ちょっとまってください。難しくはないよ、こんなにわかりやすいし、すごくおもしろいよって教えてくれるのが、入門の手ほどきというものではないでしょうか。



それも一理ある。でも、法学教師の終活としての「法学入門」は、その「難しさ」の話をむしろ中心に据^すえたほうがいいのかもしいないって、感じている。



なぜそんなことをするんでしょう。



やめときなよ、悪いコトは言わないからさ。



ワッシーの言うように、法学の楽しさを伝え、初学者にそれを感じてもらうことは、もちろん大切だと思う。でも、ただ、おもしろいよ、わかりやすいよ、って言うだけでは、30年間法学を教えてきた自分のホンネを述べていないというか、ちょっとウソをついている気がするんだな。口ではそう言いながら、内心、いやそんなにわかりやすいものじゃないよって反論してくるもうひとりの自分がいるっていうか。



あー、たしかにウソはいけないね。ボクたちの野生の王国にはウソはないよ。力の強い者が弱い者を食べる。そしてもっと強いヤツがその強い者を食べる。とってまわかりやすい真実だけの世界。そしてそのてっぺんにいるのが、うふ

心、何をかくそう、ワタクシメの一族にございます。



ありがとうございます。いますごく重要な話をしてくれ
たね。弱肉強食の世界の話。むきだしの実力が支配し
ている社会の話。たぶん人間社会も何もしないで放っておくと、
そうなっちゃう。そっちに戻ろうとする力が人間の社会にもつ
ねに働いているんだ。



おいでよ、おいで、ボクらの世界に。あつまれどうぶ
つサバンナ。略して「あつサバ」。



どっかで聞いたことあるぞ、それ。



お誘いありがとう、シツシー。でも、やめておくよ。



遠慮しなくてもいいのに。



遠慮じゃないんだ。人間は君たち、シツシーたちライ
オン一族と違って、すごくかawaii動物だから、いま
さらサバンナに戻っても生き延びられる見込みがないからだよ。



じゃ、そんなかawaii人間たちが、どうして人間の世
界では生き延びていられるのかな。しかも、地球上ど
こにでも、いっぱいいるよね、人間って。ボクらの世界で人間
に負けないほどの大群を作る生物は、そうたくさんはいないよ。
人間に圧勝できる生物がかりにいるとしたらアリくらいじゃな
いかな。大移動で有名なヌーだってアフリカにしかないから

数では人間には勝てないな。



かawaii肉体しかもたない人間が、生き延びているどころか、こんなにも地球上で繁栄してられる理由はたくさんあるだろうけれど、長い歴史の中で法という素晴らしいモノを作り上げてきたことも、少し貢献しているかな。



どうということ？



人間は、力の強い動物たちと腕力や脚力で争うことをやめて、頭脳を鍛えた。その結果、火を使ったり、道具を作ったり、言語という高度な情報伝達手段を発達させたりすることができるようになり、動物たちが簡単に近づけない存在、動物たちがたやすく餌食にできない強い集団へと、徐々に力をつけていった。そうやって動物たちを知恵や道具の力をかりて支配しつつ、自分たちの世界の内部では、法を作ることで、弱肉強食の世界に戻ろうとする力を、必死で押しとどめてきた。力だけがすべてという世界を矯正して、腕力や体力の劣る人間でも、力の強い人間と同じように生きていける世界、生きやすい世界を作り出すことを目指してきた。



その戦略が成功したのですか。



ある程度の成功を収めてきた、とはいえるだろうね。人間だって動物だから、動物的本能に反することを、知性と文化の力を使って必死でやってきたともいえる。その意

味で奇跡的なことをなしとげてきた。もちろん地球上には、それが比較的うまくいっている場所もあれば、そうでない場所もある。だから、せいぜい「ある程度の」成功かな。



奇跡的ですか。そこまでスゴイことでしょうか。



ボクはそう思う。ただ、幸いにしてそれが成功している場所と時代に生まれた人は、それが当たり前だと思っている。そういう人はこの奇跡を実感しにくい。でもそれは決して当たり前ではないことなんだ。この感じ、わかるかな。ミヤケさんは思い当たることはないかい。



たしかに物心ついたときから存在しているモノについては、それがなかった時代のことを想像しにくいですね。たとえば電話とかテレビとか。スマホのない時代は実際に知っていますけれど。



スマホどころか、ボクの場合は、実家に黒いダイヤル式の固定電話がやっとなつたのは小学校2年生のときだったから、1969年くらいのことだったな。



貧しくていらしたのですね。



いやそんなことはないんだよ。商家はともかく当時は一般家庭に電話はまだ十分に普及しきっていなかった。少なくともボクの故郷ではそうで、電話がない家庭もさほどめずらしくなかった。それでも世の中は普通に回っていたんだよ

ね。



そうだったのですか。



そういえば、この間、ボクの教え子が、お子さんに真顔で聞かれて、自分の年齢を実感したって言っていた。「ママが子どもの頃にはYouTubeがなかったってホント？」って聞かれたんだって。YouTubeどころか、ほんの25年前にはインターネットもメールも普及していなかった。



あのお、お言葉を返すようで恐縮ですが、さすがに25年前ともなりますと、「ほんの25年前」という実感はございません。むしろ、かなり昔という気がいたします。



失礼いたしました。でもね、ミヤケさんもナカノさんも、いつかボクの年齢になると、きっとわかるさ。25年前がほんのちょっと前だっていう実感がね。



そういうものでしょうか。



ああ、きっとわかる。さて、シツシーのおかげで、サバナの弱肉強食の世界のことを思い起こすことができたね。このあたりのことは、すごく大事なことから、またあとで話すことにしよう。とりあえずいまはシツシーにお礼だけ言って、法学の難しさの話に戻るね。



よくわからないけど、手柄をたてちゃったみたいだな。

喜びのひと吠え。**がおおおおっ！**



おどかさないでよ。えーっと、なんだっけな、法学教師のボクも、法学は最初からはおもしろく感じられないし、わかりやすいともいえないと思っている、という話だったね。



そうそう、ウソついちゃいけないよ、って話。



何度も言うように、法学のおもしろさは、最初からはなかなかわからないものだ。それがわかり始めるのには、だいぶ時間がかかる。たとえば言えば抹茶やコーヒーと同じさ。美味しい抹茶やコーヒーには「甘み」や「まろやかさ」がある。でもその味は「苦み」や「酸味」のうちにある。あとのほうの味が強いから、抹茶やコーヒーを飲みなれない子どもには、たぶんその味わいがわからない。でも大人には精妙で芳醇な美味しさがよくわかる。



ビールもっ！



あねさま、はしたのうございます。



あ、ごめん。



苦くて酸っぱいか。やっぱりマズそうだな。サバンナに帰ろうかなあ。

あとがき

駆け出しの助教授時代、今は亡き恩師から、「学問的業績のない若造のうちは啓蒙書など書いてはいけない。」という御助言をいただいたことがある。先生の声ははっきり耳に残っているのに、その日からもう25年近い歳月が流れた。その間、わずかな学問的貢献しかできなかったことを恥じる一方、若造を自称できない年齢に達して久しいことは認めざるをえない。

そんな時、有斐閣から、「法律の学び方」について、初学者向けの超入門書の執筆を依頼していただけたのは、幸せなことであった。それによって生まれたのが、『法律の学び方——シッシー&ワッシーと開く法学の扉』と題する本書であり、2017年に有斐閣から出版した『判例の読み方——シッシー&ワッシーと学ぶ』（以下、前著）と姉妹編をなす。

難解で退屈にみえる法律は、古今東西の初学者をしばしば絶望させてきた。将来の生活のため、つまり「パンのための学問」と割り切って、我慢して勉強を続けている人も多いただろう。法律の手ほどきをいちばん最初に行う教師は、まずは初学者のその絶望感に寄り添うべきではないか。そのうえで法律の背後にある味わい深さを静かに語り、初学者の「心の持ち方」が自然と前向きに変わるのを待つべきではないか。入門段階で伝えられる具体的な法律知識は、所詮ごくわずかである。法律学習のスキルも、法律を学びたい気持ちがあれば無味乾燥であろう。だからこそ、そのような心のありように働きかけることこそ、「法律の学び方」の最初にして最重要の課題なのではないか。本書にはそのような思いを込めた。

本書の副題は「シッシー&ワッシーと開く法学の扉」である。読者が開く扉の先には、冷たく暗い混沌ではなく、温もりと光のある宇宙が広がっていると予感させ、思わず歩みを進めたくなるような、そんな気持ちにさせる本を書きたかった。

前著と同様に本書でも、有斐閣編集部の三宅亜紗美さんと中野亜樹

さんが、企画から校正までずっと伴走してくださった。シッシー＆ワッシーは有斐閣の社章から抜け出してきた獅子王・鷲王の世を忍ぶ仮の姿、両王を秘術で召喚するのが「くのいち」のミヤケとナカノ、そこに法学教師のアオキ先生が加わるという設定も、前著とまったく同じである。本来黒子である編集者をキャラクター化して表に引っ張り出すのは、いわば「二重の掟破り」である。しかし、対話篇の性質上、狂言回しが必要だと考え、当惑する三宅さんと中野さんにわがまを聞き入れてもらった。しかも、本書では「くのいち」のセリフを前著より増やした。それには理由がある。数年前、一橋大学生協書籍部で、学生たちがお気に入りの本の宣伝ポップを作るイベントがあり、匿名の法学部生が前著の売場にポップを立ててくれた。そこには「一番心に残った人物」の記入欄があり、「くのいちのミヤケとナカノ」と大書されていたのである。私が造形に成功していたのは、シッシーでもワッシーでも、ましてやアオキ先生でもなく、ミヤケとナカノだったらしい。

小著とはいえ本書の原稿が完成するまで時間を要した。三宅さんと中野さんは、その間、温かく厳しく催促をしつつ辛抱強く完成を待ち、いったん草稿ができてからは緻密で迅速な検討を繰り返してくれた。ありがたいことである。お2人のどちらが欠けても、本書は誕生していない。シッシー＆ワッシーの「生みの親」が私だとすれば、お2人は「育ての親」である。

他にも感謝しなければならない方々がいる。ここでは、裁判官の林まなみさんと、シマダノリヒコさんのお名前を特に挙げたい。かつて一橋大学法学部の私のゼミで学んだ林判事は、本書の草稿を丁寧に見てくださり、実務の視点から有益なコメントをくださった。自慢の教え子の御教示により、迂闊な教師はいくつかのミスを避けることができた。また、シマダノリヒコさんは、前著に引き続き登場キャラクターのイラストを描いてくださった。登場人物の対話を楽しく視覚化できるのも、ひとえにシマダノリヒコさんのおかげである。

ところで、この「あとがき」を書いている現在、新型コロナウイルス感染症の暗雲が世界中を覆い、大学教育もオンライン講義が中心となっている。張り切って法律を学び始めようとしたのに、孤独でつらい日々を送っている学生もたくさんいるに違いない。この小著が、そういう諸君の心に射し込む小さな光となってくれることを、切に願う。

2020年9月
青木人志

著者紹介



青木人志（あおき・ひとし）

一橋大学大学院法学研究科教授

1961年（昭和36年）山梨県富士吉田市生まれ

趣味

ワードゲーム（たほいや、Scrabble、Boggle）。

学生時代の思い出

大学に入り田舎から上京したとき「喫茶店」はまぶしい場所だった。カプチーノというオシャレなものを頼んでみた。受け皿に添えられたクッキーをかじって歯が折れそうになった。シナモンスティックなんて知らないから。サンドイッチと一緒に運ばれてきたキュウリのピクルスをひと壺ぜんぶ完食したこともあった。お好みで2、3個だけ取るものだとは知らずに。ある時は好奇心に駆られて、カタカナ表記の未知のソーセージを注文してみた。「ちよりん、ください」。ウェイトレスさんが無表情に聞き返した。「ちよりぞ、ですね？」と。

読者へのメッセージ

どんな学問にも、まずは棒をのみこむように覚えなければならない基礎知識があります。法学も同じです。初学者のみなさんが、本書を読んで、「その先」に広がる法律の魅力を予感してくださることを、願っています。



● 法律の学び方

シッシー&ワッシーと開く法学の扉

2020年11月25日 初版第1刷発行

著 者 青木人志

発行者 江草貞治

発行所 株式会社 有斐閣



郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-17
電話 (03) 3264-1314 [編集]
(03) 3265-6811 [営業]
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

組 版 株式会社明昌堂

イラスト シマダノリヒコ

印 刷 萩原印刷株式会社

製 本 牧製本印刷株式会社

©2020, AOKI Hitoshi. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替いたします。

ISBN978-4-641-12621-3

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。
